

ピアホームだより

2012. 1. 10

年頭の決意は2月号にして、今回は、以前まとめた統合失調症のトピックスを載せます。

第32回家族と専門家の交流会より

10月30日、顧問白石先生主催の32回交流会がありました。年2回のペースで10数年、本当に良く続いています。私も、ここで白石先生にお会いしてから10年近くなります。まさしく豊穡の海のようなようでした。

今回の目玉は、東京都医学総合研究所糸川昌成先生による講演、特にカルボニルストレスは、統合失調症の陰性症状の改善を目指し、治験を試みておられることから、ビビッドでタイムリーな話題だったと思います。

お話は、4つの話題に構成されていました。

1 遺伝子とは

双子研究から細胞→DNAのお話しに行き、

脳神経細胞を説明しながら伝達物質とレセプターへと話が進みました。

2 ドーパミン受容体と遺伝子解析

どんな病気にも、遺伝的な要素と環境要因がある。糸川先生は、遺伝子解析が研究テーマ。先生の研究における当時の先生融教授（私の娘が遅発性ジストニアとなった時行き当たった先生、何という因縁！）より、ドーパミンレセプターの「多型」を調べよ！との指示があり、3年をかけて調べあげた結果、

1993年 第7エクソンにD2受容体の多型を発見する（ドーパミンD2受容体遺伝子は8カ所に分かれている）。それは、S311C多型331番目のセリンがシステインに変わったものであった。糸川先生は、S311Cを持った患者にシステインを持っている人は陰性症状が軽いなど、“人当たり”の共通点があることに気づいた。

3 脳科学から見た援助者のあり方

時間がなくてとばされたが、要は、脳科学からみても肯定的な生き方で、色んなことが改善されることが多いという。

4 カルボニルストレスと統合失調症

松沢病院である患者と出会う。GL01に注目し変異を発見する。この遺伝子は酸化ストレスの解毒に関わっている遺伝子。機能していないと、メイラード反応でカルボニル化合物が蓄積する。最終産物がAGEで、統合失調症の46%の人でAGEが蓄積し、ビタミンB6が低下していた。AGE蓄積は統合失調症のリスクを25倍上げる。ビタミンB6の欠乏は統合失調症のリスクを10倍上げる。だったら、ピリドキサミンを投与してみてはどうか？と治験の開始した。

糸川先生のお話

糸川先生は自分の母親は亡くなったと聞かされてた。学生になり、外科医を目指すようになった。しかし、精神科で実習をしたときに、統合失調症の人と出会い自分は精神科医になろうと決めた。後で知ったことだが、母親は死んではいなくて統合失調症がひどかったので別居させられた。糸川先生は、研究と臨床をずっと両方とも続けており、現在も病院と研究棟を行き来している。

1月の行事

<1月13日>アドボケイト会新年会